

未曾有の激変が続き、「非常時」ともいわれる今日、経営者の誰もが会社の存続をかけて、日々必死の努力を送っています。

歴史を振り返るとき、非常時にあって生き長らえた人と、無念にも死を迎えざるをえなかった人とが、残酷にも明確だった事実があります。

第二次世界大戦時のナチス強制収容所から生き延びたという、なまなましい体験を収めた『夜と霧』(心理学者のフランクル著)という本があります。その中で、収容所に入っていたフランクル氏は、究極の状況の中にあつて、生死を分けたのは「心の持ちようだった」と述べています。

生きるか死ぬかの限界状況に置かれて、一方は「(この悲惨な)人生から何が期待できるのか」と考え、もう一方は「人生が何を我々に期待しているのか」と自らに問いを發したのです。

結果として、「人生から何が期待できるか」という受身的な考えをした人々が倒れ、逆に、客観的に自分自身を見つめて、「人生が何を我々に期待しているのか」と、過酷な状況に対して積極的に意味を見いだそうとした人々が生き延びたのでした。

営業担当のAさんは、それまで前任の何人もの担当者が、どう取り組んでも上手く営業展開できなかった地域に配属転換となりました。最初の一年は、過去の担当者と同様、まったく成果が上がりませんでした。それどころが、想定外のトラブルが頻繁に起こり、その地域の営業所閉鎖も余儀なく



人生が何を我々に期待しているのか

される事態にまで至りました。

ただAさんは、あきらめる気持ちにはなれませんでした。それは「この地域は母の出身地。偶然にも担当になったのは、自分がこの地を展開するために選ばれたのだ」という使命感を秘かに持っていたからです。その後、可能な限りのあらゆる縁を頼り、営業を展開していくうちに、不思議に多くの応援者も現われ、翌年は当初目標の三倍もの売り上げを果たすことができました。

また、倫理法人会役員のYさんは、普及を含め倫理法人会の活動に、もう一歩踏み込めないところがありました。ある日の経営者モーニングセミナー(MS)で、「私は倫理法人会活動を通じて、世の中の親になる」との講師の話聞いたのです。その言葉がYさんの心に火をつけ、「私もこの地域の母になろう!」と心が決まりました。

それからはMSの運営をはじめ、普及活動や若手経営者の育成に対して、本気で取り組めるようになり、その働きはYさんが所属する単会から、新たな会を立ち上げる原動力ともなっていました。

苦境へと追い詰められた時に、「この苦しみからは何も得るものは無い」と、ただ悲観的・受身的に判断をしてしまっか、それとも「この苦しい状況には何らかの意味がある。誰かが自分を試し、期待しているのだ」と前向きに受け止めるのか。そこが新たな展開が可能かどうかの、大きな分かれ目です。

あなたは物事を受身的に捉えますか? それとも積極的に対処しますか?